

も船守彌三郎夫婦の厚い情けを受けては父母の伊東に生れ替りて日蓮を感れみ給ふかと思召され、龍の口の土壇場にても、今度頸を法華經に奉り其功德を以て父母に回向せんと、則宗祖は諸の善根功德は先づ父母に奉つたのである。身延御隠棲の後も尙父母を慕ひ、嶮阻極まる五十町の急坂を風雨を厭はず奥之院に登られ、東の方遙かに故郷を眺めては暗涙に咽びたまひて追善の御讀經遊ばされし如きは、釋尊はいざ知らず、他に於て如是孝養を見る事が出來得るであらうか。我々法華經の行者は聖訓に隨ひ恩を知り而して報恩の修行が何より肝要である。

宗教家の覺醒

朧 月 生

今や文運日と共に進み、明治維新己來、五十年の進歩は實に偉大なものである。然し此れを以て完全なる進歩とは言ひ得られまい、何故なれば、

そは物質的文明にのみ走りて、其處に何等内面的精神文明が伴はぬからである。科學文明は可成進歩した様であるが、精神的文明も是に伴つて進歩したであらうか、甚だ疑はしいものである。

諸君試みに眼を現時の思想界に放て見よ、其處に何れだけ、吾人に満足を能へる者があるか。ないではないか。殊に思想界に於ても、宗教界に於ても然うである。現時の宗教界は如何だ。其の信仰は太く衰へ徒らに儀禮の、末節に華美を競ひ、僧侶は救濟の道を忘れて、衆俗と共に、現世の欲求にのみ吸々として、日も足らざる有様ではないか、往古淳朴の風、敬虔の俗、蕩然として、將に地を掃はんをして居る。實に宗教界の危機である。宗教家は、大いに覺醒せねばならぬ。殊に吾宗の如き、一生活動を以てせられし、祖師日蓮の門下として、其の主義を繼承する吾人、斯の如くにして、尙本化門下と稱する資格があるか。吾宗は實に六百年の昔、宗祖が、鎌倉の街頭に、四箇の格言を絶叫せられてより、己來多くの、先師の、血

と、涙を以て、織り出された宗旨である。吾人今にして、大いに覺醒するべくんば、如何に、口に、皆歸妙法を、唱ふるも、詮なき事である。戦つてこそ始めて、向上もし、發展も、爲し得らるゝのである、争闘があくして、向上は無い、闘争があつて、始めて、向上があるのである。吾人が、吾が日蓮主義を、宣傳するに當つて必ずや幾多の闘争が、演じられるであらう。何故なれば、それは我が弘經法が、折伏主義であるからだ、實に本化の弘經は、折伏でなくてはならぬ。然し時機によりては、攝受的順化も併せ用ひなければならぬ。宗祖當時と今とは、時に於て、人情に於て、所化の智識に於て、大いに異つて居る、故に宗祖の折伏を以て、一概に現今を律する譯に行かない。現代は、凡てを、科學的に、組織し様と、企てて居る時である、斯かる時に處すに、我々布教家は、奈何しても、布教上の全部面を、學科的に、調整しなければならぬ。現代は、凡に智的である、故に我等布教家は、勢ひ、豊富な、而も確實な、思

想がなくては、衆人をうかつかせ、誘引する事は困難である。唯説教の様式や、説材の配列、を知るのみが、布教者ではない、高座の上での、手付さや、辯の廻し方が、巧いのが、必ずしも布教家の誇りではない。今の布教は、談して居る時、一時感動を興へるだけでは駄目だ、其の土地の人情氣風、傳説、又信仰狀態等を、調査した上で、臨機の布教を爲し、聽者をして、永久に、忘れられん何者かを、興へなければならぬ。斯く布教するには、布教に對して、今少し熱誠ならては駄目だ。要するに、今の宗教家には、布教に對する、熱誠が足り無い、で勢ひ死氣力に在る、實際今の宗教家には氣力がない。吾が徒は、最少し布教に熱誠を以て對機に對して万斛の同情、滿腔の慈悲を以て、而も、如説修行抄の、不惜身命の、聖旨を奉じ、宗家第二の繼承者として、充分に其の責任を果さねばならぬ。諸君大いに、醒めよ、而うして奮闘し以て本化門下たるの責任を果し、后靈山に於て宗祖の慈顔に見ゆ可きである。六、六、一三、